

伝統芸能を継承する佐渡の小さな学校を訪ねて

—高千中学校 真野中学校 小倉小学校

編集部

高千中学校の文弥人形

1 高千中学校の校区は、校歌にも「窓辺に近く波光る」と歌われるように、相川から北の外海府の海岸線に沿って点在する18集落から成り立っています。国の名勝に指定された海岸線には大小の岩礁や断崖絶壁が点在する、変化に富んだ海岸がつづきます。冬は強い季節風が吹きますが、春から秋にかけては比較的温暖な気候です。

校区内の人口は今年度で1,500人。生活は農業のほかにはほとんどの家庭では相川や国仲平野の町に働きに行っています。

今年度は18集落中で8集落に中学生がいません。そ

のため運動会は3年前から隣接する保育園、小中学校で共同開催しています。

今年度の生徒数は1年生が12人、2年生が9人、3年生が9人の合計30人です。教職員は校長、教頭のほかに教員7人、栄養、養護、用務員を含めて12人です。

2 佐渡の小中学校では佐渡学と称して①伝統芸能コース、②トキの住むコース、③佐渡から海外に発信する金山コースの三つを学ぶことになっています。

高千中学校では総合的な学習の時間で、①の伝統芸能コースは、学区内の矢柄地区に伝えられている文弥人形を学校としてとりこんでいます。

練習は金曜日の総合の時間の3時から4時までの1

時間が当てられ、年間練習時間はおよそ35時間程度で、練習には校外から2人の方が指導にあたっています。指導では三味線の弾き語りの部分は台本がありますが、保存会が吹き込んだテープを使用して、これにあわせて生徒たちが人形芝居を演じます。

出し物は「五条の橋」「粟津ヶ原」のどちらかを3年間通して学ぶことにしています。上演時間は10分から15分程度です。

学習のねらいは郷土をよりよく理解するために地域の素材を積極的に取り上げ、地域の人材の協力を得て郷土愛を深めることに置いているとのことです。

約半年間練習を積んで発表は夏から翌年にかけて行われます。

8月 高千芸能祭（グラウンド）

11～12月 文化祭 総合学習の発表

市生涯学習センター フェスティバル

2月 相川芸能祭

3 学校で文弥人形を特別教育活動に取り入れるようになったのは、合併前の外海府中学校の学区内の矢柄地区にはもともと文弥人形芝居がさかんであり、祭り

には神社に奉納されていましたが、学校でこの郷土芸能を生徒たちに教育活動として伝承させようと要請したことから始まりました。

当時は郷土芸能クラブを立ち上げて練習を続けました。この外海府中学校が高千中学校と合併したことから高千中学校の文弥人形クラブとしてうけつがれて今日に至っています。

1997（平成9）、98（同10）年には文部省の伝統文化教育推進校に指定されました。

文弥人形は江戸時代の17世紀後期に大坂で岡本文弥によって広められた語りの古浄瑠璃です。出し物は合戦ものや悲話が多く哀調を帯びた曲調から「泣き節」「憂い節」といわれました。

明治初年に沢根の文弥語りと小木の人形遣いが協力して現在の文弥人形芝居をつくったとされています。1977（昭和57）年には国の重要無形民俗文化財の指定を受けています。

佐渡には現在、人形芝居と呼ばれる郷土芸能が3つあります。

① 説教節

これは古浄瑠璃を基にした芝居で、佐渡には江戸時代後半に伝えられたといわれています。高幕式の舞台人形遣いは「裾突き式」で「陰遣い」が特色です。出し物は主に金平物といわれる武勇物が中心です。

② のろま人形

のろまは江戸で流行した道化芝居の流れを汲むといわれ、19世紀の天保年間に佐渡で上演されたことが記録に残っています。

のろま人形芝居は、説教人形芝居の間狂言として間抜けでお人好しの「木之助人形」として島民に親しまれてきました。

③ 文弥人形

文弥節は18世紀後半には島に伝えられ、明治初年にはこれまでの文弥節にあきたらない人々によって人形遣いと組み合わされたという。

人形遣いは一人遣いで「背中突込式」、御殿式舞台で上演され、出し物は近松門左衛門の時代物が多い（『新潟県史・資料編21』）。

3年生の荒井瑠伽君は伝統芸能を通して「地域を知り、さらに地元が好きになった」「自分がやらないと『文弥』は続かない」（『新潟日報』2010・5・26）

と決意を語っています。

真野中学校の狂言

1 真野中学校は小佐渡山脈のふもと、国仲平野の南西の端にあり、真野湾に面しています。近くには国指定の佐渡国分寺址や県下唯一の五重塔がある妙宣寺などの文化財があります。

真野中学校は現在、1年生が2学級46人、2年生が2学級62人、3年生が1学級40人で、合計148人が学んでいます。

真野中学校で鷲流狂言を教育活動に取り入れたのは1979年（昭和54）からです。その当時はクラブ活動の一つとして実施していましたが、現在は総合的学習時間の中に取り入れて、必修のクラブ活動として実施しています。

今年度の部員は1年生が2人、2年生が3人、3年生が3人の合計8人です。部活は原則として3年間継続することになっています。

年間通しての練習時間は18時間から20時間程度ということです。これは総合的学習時間を3期に分けて、そのうちの2期分を総合郷土として必修クラブに充てて

いるからです。活動期間は6月中旬から11月までです。1年間で1曲、3年間で3曲を目標に指導しています。衣装は地元の保存会から貸与されています。

2 鷲流狂言はもともと大藏流、和泉流と並ぶ三大狂言でしたが、戦後になって衰退して無くなったといわれていますが、1979年（昭和54）に佐渡と山口県に伝承されていることが明らかになりました。

そのために鷲流狂言を継承するために、子どもたちの部活という形で伝えることになりました。

佐渡にいつごろ伝えられたかは明らかではありませんが、江戸時代の文政年間に島民が江戸の家元に弟子入りした記録があります。また明治初年頃にも島民が家元に弟子入りして、島にもどって弟子を養成した記録があります（『新潟県史・資料編24』）。

1981年（昭和56）からは国や県の補助金をうけて公民館で講座を開いて伝承に努めています。

3 子どもたちの指導には町の鷲流保存会から指導者2人が、学校に来て指導にあたっています。

指導は全編を通してストーリーを理解させ、その上

で第一期として、最初に台本にふりがなを付けることから始まります。第二期にはセリフの読み合わせ。第三期にはセリフにあわせて動作の練習をします。

最後に11月の文化祭で練習の成果を発表します。12月には総合郷土の発表会があります。そのほかにも真野地区の芸能祭や地区の祭りなどでも発表します。

2004年（平成16）には全国子ども芸能大会ごどもまつり（東京・日本青年館）で関東B代表として「附子」を発表しています。

指導者の本間裕亨さんのお話では、台本にある古語の「てふてふ」などのふだん使わない古い言葉を理解させるのが難しいという。そのためできるだけ子どもたちに調べさせるため、図書館で調べ方も教えているとのことでした。

また狂言のもつ「おもしろさ」を子どもたちに理解させる指導をしているということでした。

本間裕亨さんは、3年生になって「間違えずに演じたときはとてもうれしい」と話す生徒もいて指導の甲斐があると語っていました。また指導を受けた卒業生のなかには、謡曲の専門家になっている人もいます。

学校では問題点として①生徒に複数年の継続を奨励しているが、年によつて希望する生徒数に変動があること。②各種の大会や学校行事等で毎週継続が困難であること等を指摘していましたが、これはどこの学校でも共通する悩みのように感じました。

小倉小学校の鬼太鼓

1 小倉小学校は小佐渡山脈北東の中腹部の海拔100メートルに位置する農山村で、地区では主に米、椎茸、柿など生産しています。

小倉小学校は1873(明治6)年創立の伝統ある学校です。今年度の在校生は1年生が3人、2、3年生各1人、4年生が3人、5年生が2人、6年生が3人の合計13人です。1、2年生、3、4年生、5、6年生の複式三学級です。学区内の戸数は92戸でそのうち学校に通っているのは7戸のみです。

教職員の人数は計8人です。

2 鬼太鼓は佐渡ではオンデエコと呼ばれ、小倉では村の若者(男性)を中心に継承されています。子どもたちは保護者、地域、学校の職員で構成された鬼太鼓育成会から指導を受けてきました。現在、佐渡島内

で子どもたちが鬼太鼓を演じている地区はいくつかありますが、小倉小学校では1974(昭和49)年から学校の教育課程の一環として、学校と保護者、地域の指導者が一体となつて指導に当たっています。また、総合的学習の時間では、鬼太鼓の歴史を学習したり、鬼の面を作ることなどをして、小倉の鬼太鼓のことを学んでいます。

夏は子ども鬼太鼓育成会の行事として合宿をやつて練習します。男子は1年生から鬼の練習をし、腕上げ方や横飛びの仕方など厳しい指導が入ります。女子は太鼓を打ち、篠笛を吹きます。篠笛は大人でも音を出すのが難しい楽器ですが、上級生の女子が直接手をとつて教えます。何度練習してもうまく出来ずに悔し涙を流す生徒もいますが、この合宿を通して目に見えて上達します。

2月から行う鬼太鼓引継ぎ月間では、毎日、学校で練習し、この期間は上級生が下級生に鬼や太鼓、笛を教えます。

毎月の練習、鬼太鼓合宿、鬼太鼓引継ぎ月間の取り組みにより、鬼太鼓の技術が継承されていきます。

3 島内には鬼太鼓の組が約100組もあるといわれています。いずれも村の神社の祭礼に欠かせない芸能になっています。

五穀豊穡、大漁祈願、あわせて家内の厄払いなどを祈願して、4月春祭り、9月の秋祭りを中心に演じられます。小倉地区でも村の物部神社の春の祭礼では子どもたちの鬼太鼓が奉納されます。

記録によれば、天明年間（1780年代）に佐渡金山の金掘りたちが祭礼で「かねほり穿の所作に贗て太鼓を打、是を鬼太鼓と云という」記事があります。

現在、佐渡島内にある鬼太鼓は前浜系、相川系、国仲系などに分類されています。なかでも前浜系は篠笛が入るのが特徴で、小倉の鬼太鼓はこの前浜系に属すると言われます（前掲書）。

子どもたちによる鬼太鼓の昨年度（平成22年度）の発表は次の通りです。

4月15日 小倉例祭

5月16日 長谷寺ぼたん祭

5月30日 地区運動会

6月15日 やわらぎの里訪問

7月24～25日 合宿

8月22日 安寿天神祭

10月4日 黒坂黒太郎氏コカリナコンサート

10月31日 地区文化祭

学習発表会

12月5日 佐渡市生涯学習フェスティバル

3月5日 在校生への引き継ぎ式

はじめてふけた、ふえ

小倉小学校1年 余湖 れいな さん

フーフー、いっしょうけんめいふえているのに、どうしてもかすれた音になります。（略）わたしは、だんだんいやになってきました。しまさんが、

「力いっぱいふいてもだめだ。ほら、シャボン玉みたいにやさしく、かるくふくといいいよ」

とわたしに教えてくれたので、わたしは下くちびるにちよんとふえをのせて、ふいてみました。

ピーと音がしました。わたしは「やったあ、音がでた」とさげんでしまいました。

（平成17年『小倉子ども鬼太鼓三十周年記念誌』より）

佐渡の学校を巡って

昨年と今年と伝統芸能を教育活動に取り入れている小さな学校を訪ねました。これらの伝統芸能の多くは本来、神事であったことから、成人の男の若者が中心に継承されてきました。

島の人口は1965（昭和40）年に102、925人でしたが、05（平成17）年には67、386人に、35%も減少しました。伝統芸能の継承に危機感をもった各集落では子どもたちに学ばせ、伝統を守ってきた。学校の教育活動でもゆとりの時間が設置され、教育課程に積極的に伝統芸能を取り入れ、最近では総合の時間に取り入れることになりました。伝統芸能は学校で指導できないことから、地域の協力が必要になり、地元、父母、学校一体で取り組まれ、地域づくりにも役立っています。また神事としての性格は変わりませんが、最近では町の商工祭、老人ホーム、地区の文化祭などでの発表が増え、伝統芸能としての性格も少しずつ変わってきているように思います。発表の機会が増えたことが子どもたちの練習への意欲につながっていることも確かです。

問題がないわけではありません。今後、佐渡の人口は2018（平成30）年には佐渡全体で45、000人余になると推測されています。少子高齢化の影響は避けられません。

現実には小中学校の統廃合によって、これまで取り組んできた伝統芸能ができなくなった事例もあります。

学区が広がったために、特定の地区の伝統芸能だけを学校が取り上げにくくなったからです。新たな学区内のすべての伝統芸能を取り上げることも困難です。また学校の統廃合の結果、バス通学が始まり放課後の利用も制限されるために、放課後の部活として取り込むことも難しくなっています。

（大滝浩道・所員）

